

地域文化を生かしたまちおこし
「雪舟を通じて新たな交流を生み出す」

第十三回
雪舟
サミット
【記録集】

SESSHU SUMMIT
IN IBARA



【基調講演】



基調講演

山形大学教授

みやじま しんいち

宮島新一氏

【プロフィール】

愛知県生まれ。京都大学大学院文学研究科修了(文学博士)。京都府に就職した後、京都国立博物館、文化庁、奈良国立博物館、東京国立文化財研究所、東京国立博物館学芸部長を歴任する。九州国立博物館設立準備室総主幹(のちに兼副館長)としてその創設に携わり、開館の翌年、2006年に定年退職。現在は山形大学教職大学院教授。

演題「雪舟の故郷 備中」

宮島でございます。よろしくお願いたします。私は四年前にも、この井原市の皆さんのお招きを受けて雪舟についてお話をしたことがあります。その時は雪舟の没後500年の記念の年で、井原市のお招きだったこともありまして、山寺図、ここに小さいですが写真がありますが、これは



井原の重玄寺ではないかというお話と、雪舟の逝去地について話しました。雪舟

が亡くなった土地については昔から二説ありまして、一つは益田市、もう一つがこの重玄寺です。しかし、明治から昭和の始めにかけて、益田市民の圧倒的な運動によりまして、もう今では益田が雪舟の亡くなった土地だということで一般に認められております。井原の皆さんも少し頑張ったらいかがですか、という話をしたわけです。今回は雪舟サミットの基調講演ということですから、本来は各市や町に公平な立場でお話をしなければならいんですけども、内々に井原市さんの方からどうか千畝周竹と雪舟の関係、それから重玄寺についてお話を入ってくださいという密命も受けておりますので、主催者のご苦勞に敬意を表してですね、今日の



テーマは「雪舟の故郷 備中」ということでお話しさせていただきます。遠くから来られた方々には大変申し訳ないんですが、その点はちょっとお許しいただきたいなと思っております。

雪舟の関係地というのは大変広いんですね。私の考えております雪舟の足跡を拾っていきますと、東は静岡、長野、新潟を結ぶ大地溝帯、フォッサマグナとありますがそのラインまで。西は大分、福岡、佐賀、長崎という九州の北半分ですね、そのあたりまで雪舟は足跡を残しておりますので大変広い範囲に及ぶわけですね。本当はそういうふうに関各地に話題を振らなきゃいけないところですが、時間の関係で備中に絞らせていただこうと思います。

(雪舟の生誕地)

雪舟が生まれた土地につきましては、同時代の親しい禅僧で友人が雪舟の本貫地は備之中州、備中とはっきり書いておりますので、これは間違いありません。姓は藤原氏とこれも書いておりますので、藤原氏だということもはっきりしております。備中という土地はご承知のように、もとは備前、そして備後と一つの国だったわけですね。それだけでなく、かつては備前と一緒だった美作、それからさらには、今は兵庫県に入っております播磨の西の一部も吉備の一部だったんですね、非常に大きな地域、吉備王国

がかつてはあったわけです。そう言いますと、今言った国々は、まとまった結束の固い地域のように思われるかも分かりませんが、現在備後は広島県に入っております。そういうことを考えますと、どうも備中という国の性格ですね、それは東の京都にあります室町幕府、西の山口にあります大内政権とのちょうど中間地帯のような地域、桃山時代に入りますと、織田・豊臣政権と毛利政権の中間地帯。ご承知のように豊臣秀吉は備中高松を水攻めにして毛利の大軍と相対峙してその戦の最中に信長が本能寺の変で死んで引き返したという話は有名ですが、備中で両勢力、東西の大勢力が戦う、そういう歴史的な土地柄であったのではないかなと思うのですね。ですからこの備中という土地は、東西の大きな力に両方から挟まれて、言わば断層地帯のような、ちょっと地盤の弱い性格の土地柄ではなかったかなと、私は勝手に推測しているわけですね。土着の人々が、二つの勢力にはさまれて大変苦勞したのではないかなという気がしております。雪舟もそういう土地柄で生まれた人ですから、おそらくそういう苦しみを味わった人ではなかったかな、というふうに考えております。生まれ育った土地がその人々に与える影響というのは人によって違うと思うんですけども、私は先ほどご紹介がありましたように愛知県の生まれです。名古屋といえば徳川御三家の一つですから、当然顔は江戸、東京の方に向いております。ですから普通、学生生活を送るのは東京が圧倒的に多いんですが、私はちょっとヘソが曲がっていたせいもありまして、それから日本の美術を楽しみたいという気もありまして、京都で学生生活を送って、そこで就職して16年ほど住んだんですけども、ところがそのあと後半生は、先ほどお話いただきましたように東京に移るということになりました。や

はりそれは愛知県民の習性が少し、影響を与えたのではないかなという気がしております。雪舟も、最初は京都で禅僧として修業をいたしました。しかし、後半生は山口で大内家を拠点とし、全国的に、今言いましたような広い範囲で旅をしておりますが、拠点は山口に置いたというように東と西と分かれて一生を過ごした、というのも、やはり備中という土地柄の一つの影響ではないかなと推測しております。

備中といっても、結構広いんですね。東は、今は岡山市の一部になっていますが、そこも備中であります。西はこの井原市が西の外れで、すぐ隣は備後になっておりますが、そういう広い範囲ですが、生誕地、雪舟が生まれた場所については、今の総社市の赤浜ということで、もう誰も文句を言う人がありません。といいますのは、江戸時代の初めに黒川道祐くろかわどうゆうという儒学者でお医者さんという、昔はそういった人がいたんですね。この人は安芸の芸州の浅野藩の儒医として経験があったので、京都の人ですから、浅野藩での勤めの往復の間に様々な土地の伝承を拾ったのでしょう。その人が赤浜の出身だと江戸前期に書き残しております。従来は、なぜ黒川道祐が赤浜説を言うようになったのかという理由が分からなかったんですが、それがこの地元の井原市の元市史編纂室の大島千鶴へんさんさんが、重玄寺ちゅうげんじの住職でありました千畝周竹せんみょうしゅうちくという人の語録から赤浜にまつわる記事を見出して、一気にこの赤浜説の信憑性がぐんと増してきたわけですね。『雪舟と井原市』という資料が皆さんのお手元にあると思うのですが、その最後の頁、裏表紙に、その問題の『也足外集』という千畝周竹せんみょうしゅうちくというお坊さんの書き残した文章があります。中段に写真がありますが、その左側の方ですね。そこに冒頭の二行ほどとばしまして、読み辛いかも分かりませんがちょっと読んでみま



『也足外集』（全三巻・宗雲寺所蔵）

すと、三行目ですね、「英昌小比丘某」という文字の下に「備之中州赤濱保居住」という文字が見えると思うんですね。要するにこの文章は、備中の赤濱というところに住んでいた、おそらく武士だと思



『也足外集』赤浜の藤氏記載部分

うのですが、その武士の父の三十三回忌の法会にこの千畝周竹というお坊さんが読み上げた、禅宗では偈と呼んでいます、それを書き残したものでありますが、そこに千畝周竹さんと赤浜の藤原重定という武士のお父さんの三十三回忌の話が出てくるんですね。先ほど言いましたように雪舟も藤原氏です。で、この赤浜の住人と千畝周竹が前々から関係があったことがこれによって分かるわけですね。おそらくここに出てくる藤原重定という人は雪舟の父の同世代の人かと思われます。ということともう一つ、その右側の写真なんです、その頁の左側の下の方に「楊公の山水圖に題す」という詩を書いているんですね。この楊公というのが雪舟等楊の楊の略でございまして、



『也足外集』楊公の文字が見られる部分

千畝周竹は雪舟と知り合いの関係にあったという、この二つの史料から赤浜という土地が雪舟のふるさとであるという説が一気に信憑性が高まってきたわけです。雪舟という人は、話はややこしいんですけども、「雪舟」と名乗ったのは中年になってからなんですね。

それ以前は別の名前を名乗っていたことがこの頃はっきりとしてまいりまして、中年になる前に名乗っていたのは「拙宗」、音読みにしますとこれも「せっしゅう」と読めなくもないんですけれども、そうしますと雪の舟の雪舟と混同して話が混乱しますので、「せつそう」というふうに読み直しておりますが、若い時はどうもこの名前を名乗っていた。で、千畝周竹という人は、この拙宗…話がややこしくて恐縮ですが、雪舟がまだこう名乗っている時代に亡くなっているんですね。ですから、千畝周竹さんは、雪舟がまだ若い頃の知り合いということになるわけですね。そういうこともあって一層、赤浜ということが注目されるようになってきたわけです。千畝周竹という人は、非常に雪舟の小さい時から、存在を知っていたようだという事になってきたわけですね。そういうことから、非常に縁の深い人がどうも赤浜まで出向いてこの三十三回忌に加わったようでして、そこに徳本庵というお寺があったようですけれども、今はそれは姿も影も形もなく、どこにあったかも分かりませんが、赤浜の住人が三十三回忌を営む以上は当然、赤浜にお寺があったんであろうと思われま。ですから千畝周竹さんは、赤浜

に行ったこともある。若い時の雪舟も知っていた、という関係になるということでもあります。実は雪舟が生まれた土地という言い伝えに関しては、いくつか説がございます。といってもみんな極めて限定された狭い地域なんですけれども。雪舟生誕地に関しては今のところ、三つほど説がございます。一つはそこにも書きましたように、「鷺の森、鴻の橋より西、窪木より五町許東」、この窪木というのは、総社市の地名に残っておりますが、「五町許東」の高塚村は、今は岡山市内になっております。そこに「雪舟屋敷とて榎など有とん。又は田中村に有ともいへり」というふうに、先ほどの黒川道祐が記しております。要するに高塚村、現在の岡山市の高塚に雪舟の屋敷があったという伝承があります。二番目に、雪舟山新福寺というお寺が今もあるんですが、これは岡山市の高松田中というところにあります。で、この田中村に関しては、江戸の地誌類によりますと、「田中村中古迄ハ破出村とも云しほどにて昔ハ入組みて此地赤浜村に属せし事もなしにや」とある。高松田中も元は赤浜村の一部だったのではないかとこのように記しております。それから三番目に、「三手村に雪舟の出し家とて田熊氏といふ有、又側に真福寺といふ寺有なり」と。この寺も今もあります。地図をご覧くださいたいんですが、岡山自動車道の岡山総社インターチェンジというのがありますけれども、その下に雪舟生誕の地という、これは現在大きな石碑が建っている場所です。これが雪舟生誕地の石碑のあるところなんですが、その右の方に岡山自動車道を越えた反対側に高塚という地名があります。ここに高塚屋敷という生誕地の一つの伝承があります。それから自動車道を左の方に行きますと、高松田中という字があると思うのですが、そこも一つの伝承地であります。逆に自動車道を下



総社市赤浜周辺の地図

って庄内幼稚園とあるところに三手という地名がありますが、そこも雪舟のゆかりの地だというふうに、大体近いところに三ヶ所ほど雪舟生誕地という伝承地があります。川というのは、しょっちゅう流れを変えていたと思われまので、この範囲もかつては赤浜の範囲だったと思われまますが、今は全部岡山市に属しております。

生誕地に関して岡山市さんは一切発言をされておられないのは、総社に対して多少遠慮をされているのか分かりませんが、非常に奥ゆかしい態度だなあという気がいたします。このうちどこが一番有力かということは分かりません。それぞれになかなかもつともな理由がありますので、どこを生誕地にするか誰も決められないのですが、ただ、今石碑が建っている場所とちょっと違っているということだけ気になさなければ結構かと思えます。

(山寺図)

次に山寺図についてお話をしたいと思います。これが雪舟が描いた山寺図で、今は原本は残っておりません。原本は、備中の足守というところの殿様でした木下家が持っていたんですが、江戸時代に火災のため焼失して狩野家が写した模本しか現在残っておりません。ですが非常に忠実な模本ですので、雪舟が描いた面影はとて

もよく残っていて、模本とは言え大変ありがたい貴重な品であります。この図が一体どこを描いたものかという説については、学者が様々な説を唱えておりまして、今のところ説は四つあります。第一説、最初の説は、随分昔になりますけれども昭和31年に、この年も雪舟の記念の年だったので、東京や京都で雪舟展が行われた年なんです。昭和31年に京都国立博物館で雪舟展が行われました際に、有名な水墨画の研究者であります島田修二郎さんという人が図録に、これは山形の立石寺であろうというふうに書いていらっしやいます。山形の立石寺は「山寺、山寺」と通称されていて、観光地でもありますし、有名でありますから、素直にそう考えられたのではないかなという気がいたします。私は先ほどもご紹介にありましたように山形大学に勤めておりますので、本来ならば立石寺説を強調しなきゃいけない立場にありますけれども、実は山形大学へ行く前から、私自身はこの地元の重玄寺説を唱えておりまして、山形では肩身の狭い立場になっておるところでありますけれども、今更考えを変えるわけにはいきませんのでそのまま主張しておりますが、それが第一説。第二説は昭和51年に辻惟雄さんという方が、これは益田の東光寺、大喜庵であるという説を出していらっしやいます。江戸時代の記録に今の大喜庵を山寺と称したという記録がありますので、これを根拠にされたのではないかなと思われれます。で、三番目に、その翌年になりますが、重玄寺説が出たんですね。その昭和52年に重玄寺説を出された方は地元出身で井原市の西江原というところでお生まれになりました文化社会学の大変な権威でいらっしやる蔵内数太さんです。地元の方が『ミュージアム』という美術雑誌に『雪舟と備中重源寺』という論文を書かれました。先ほどのパンフレットをめくっていた

だきますと、その『ミュージアム』の表紙が出ております。地元としてはこの説を大事にしているという気持ちの表れでしょう。四番目に最後になりまして、東京国立博物館の学芸員をしていました高見沢さんという人が昭和56年にこの山寺は岐阜県の伊自良というところにあります楊岐庵とい



『ミュージアム』東京国立博物館美術誌 第321号

う寺のことだという説を発表しております。大体学説というのは、一番最後の説というのは、前の説を受けて出しますから、一番有利なわけですね。ジャンケンではないですけど、後出しが一番有利ということになりますから。今のところ、この高見沢さんの岐阜県の伊自良楊岐庵説というのが学会では一般に認められている説になっております。それに対して私は先ほども申し上げるように、この山寺はこの井原市と合併した元芳井町という町にあります重玄寺、この重玄寺というお寺を描いたものだという説を唱えております。その理由を三つほど今から申し上げたいと思っております。

この図には「賛」といまして、禅僧が絵を見た感想を書く、そういうのが四首あります。最上段の一つだけ、いかにも別格の形になっております。別格になっておりますお坊さん、村庵霊彦というお坊さんですが、こう記しているんですね。「右楊知賓画く所の図に題す。」楊知賓というのは、雪舟等楊のことですが、雪舟等楊が描いた絵に題したということしか書いてないんですね。後は自分が今八十一歳だということだけしか書いてない。普通は、トップに書く人は、この絵は誰それが私に賛を書いてくれと頼んだのでやむを得ず書くん、というか、あ

とで様々な由緒を書き記すのが普通なんですね。こんな単純に、雪舟が持って来たから詩を書いた、というふうに済ます例はないんですね。もし本当に伊自良の楊岐庵というお寺のことを描いたならば、そういう由来が何か書かれなきゃいけないですが、それが一切ない。ただ「雪舟が描いた図に題しました」ということしか書いてないというところが、まず大きな問題点であります。ということは、これは雪舟が持って来て賛をしてくださいと頼んだという意味しか取りようがないんですね。雪舟は一体どこを描いたかということについて、この村庵靈彦は何も書いてはいないんですけれども、詩の中に「雪舟」という言葉がありますけれども、ここは弥勒菩薩という仏さんが住んでいる場所ということになっております。重玄寺にもやはり山の上の方に弥勒さんを祀っていたお堂が今もあります。仏さんは、江戸時代のものに代わってしまっておりますが、そういうお堂が今もあります。村庵靈彦はどことは言っていないんですが、一応雪舟からこれはどういう寺だということは聞いてはいたのではないかな、と。それを詩の中に、賛の中に織り込んでいるのではないかな、というふうに思われます。先ほど村庵靈彦が八十一歳の時の賛だと言いましたが、これは文明十五年、1483年にあたります。文明十五年という年のいつ頃なのか、ということになりますが、詩の中に「昏花」、目がくらむという意味の文字が見えます。花といえば当時の常識でいえば桜ということになりますので、これは春を意味するのではないかな、というふうに考えられます。そのことは下に三首また賛があるのですが、冒頭のお坊さんの賛の中にも、この場合は「梅花」梅の花という文字がありますから、文明十五年の春に賛をしたことは、まず間違いのないかなと思われます。

この絵がなぜ重玄寺を描いたものかという説を言うために、伊自良説に対する疑問点をいくつか挙げてはいるわけですが、村庵靈彦は伊自良の楊岐庵ということについて一切触れていないことが一つの根拠ですが、二番目として、実際に楊岐庵を訪れたお坊さんがおりまして、そのお坊さんが楊岐庵で読んだ詩が今残っております。万里集九という岐阜の辺りで活躍していたお坊さんですが、その人の語録であります『梅花無尽蔵』の中に、文明十三年に伊自良の楊岐庵に行った時に読んだ詩が記録されております。漢詩ですからちょっと読み辛いので、私が適当に訳した訳を読みますと、「驢馬の尻尾が泥を吹き払いつつ岐阜の革手城を出る。新居の秋は主人の為に晴れている。簾を巻き上げると足もとに天下があつて、開闢以来の川と山が集まって一つに大成している」というような意味の詩を書いているんですね。伊自良の楊岐庵という寺で万里集九が読んだ詩を見ますと、どうもこの寺は高台にあつて、低いところに、眼下に川が流れていたということが分かります。その景色はこの図の景色と合うだろうか、という問題があります。どう見ても図の山寺は、山に懐に抱かれた窪んだ土地にある。実際明日行かれるだろうと思うんですが、窪んだ土地に重玄寺はあるんですけれども、実際に岐阜の伊自良の楊岐庵を訪れて詩を詠んだ人の「高台に楊岐庵があつて、遙か足もとの下の方に川が流れている」という景色ではないということなんですね。要するに、山寺図は楊岐庵の景色とは違うということが、私が現在通説といわれております楊岐庵説に反対する二番目の理由であります。三番目の理由として、この伊自良という土地は岐阜市から北の方へ12キロほど行ったところなんですけれども、今、楊岐庵というところは、どこかは分かりません。高見沢さん、この説を出し

た人は、伊自良湖^{いじらこ}という人造湖ができたので、その底に沈んでしまっているのだから今では確かめられないと記していますが、先ほども言いましたように、高台^{こうたい}にあった楊岐庵^{ようきあん}であれば、人造湖の下に沈むはずがないというふうを考えられます。もし高台^{こうたい}にあったとしたら、現在残っている寺でどなたが考えられるかということですが、甘南美寺^{かんなんびじ}というお寺があるんですけども、その甘南美寺^{かんなんびじ}の奥の方にそびえている山は釜ヶ谷山^{かまがやさん}というんですね。お釜、ご飯を炊くお釜の文字が使われている山が、後ろにそびえておりますが、実際その釜ヶ谷山^{かまがやさん}はお釜の底のように丸いんですね。図にそびえていますこの山が重玄寺^{じゅうげんじ}の大月山^{だいつげん}とすれば、大月山^{だいつげん}は非常にごつごつとした山でお釜^{かま}のような丸い山じゃありません。たとえ楊岐庵^{ようきあん}が高台^{こうたい}にあった今^{いま}の甘南美寺^{かんなんびじ}のようなところがあったとして、バックに山を描けば、当然丸い形をした山でなくてはいけないということになりますので、景色からいっても、どうも伊自良^{いじら}の説^{せつ}というのには疑問点^{ぎもんてん}が…。お寺^{てら}が仮^{かり}に沈んだとしても山^{やま}は沈みませんからね。それを背景^{はいけい}にするとすれば、こういう山^{やま}の形^{かたち}とは違ってなくてはいけないということが三つ目の理由^{りゆう}であります。

反対論^{はんたいろん}ばかり述べていてはなんですから、じゃあなぜ伊自良^{いじら}説^{せつ}という説^{せつ}が出てきたかということについて言いませんと、ちょっと公平^{こうへい}さを欠く^{かか}と思うんですが、その根拠^{こんこ}は非常^{ひじょう}にはっきりしてございまして、だからこそ皆さん信じている訳^{わけ}です。この賛^{さん}を書いた横川景三^{おうせんけいさん}というお坊さんの自筆^{じひつ}の本^{ほん}があるわけですが、その中に、この詩^しに添えて「楊岐庵^{ようきあん}図^ずに題^{だい}した」と自分^{自分}ではっきり書いてあるんですね。これ以上確かな楊岐庵^{ようきあん}説^{せつ}を支持^{しじ}する根拠^{こんこ}はありません。ですから、現在^{いま}、岐阜^{ぎふ}の伊自良^{いじら}説^{せつ}が通^{とお}っておるわけですが、ただ一つ、この自筆^{じひつ}本^{ほん}にも

問題点^{もんてんてん}がありまして、それには文明十六年春^{ぶんめいじゅうろくねんはる}の作^{さく}として記載^{きざい}されているんですね。村庵^{そんあん}霊彦^{れいげん}は、文明十五年^{ぶんめいじゅうごねん}の春^{はる}に書いています。横川景三^{おうせんけいさん}はなぜか一年後^{いちねんご}にこの賛^{さん}を書いたことになります。この一年^{いちねん}という歳月^{さいげつ}が問題^{もんてん}になるのではないかなというふうに思っております。といいますのは、この楊岐庵^{ようきあん}というお寺^{てら}は、春岳^{しゅんがく}というお坊さんの依頼^{いらい}によって横川景三^{おうせんけいさん}は賛^{さん}をしておるんですけども、この春岳^{しゅんがく}、春蘭^{しゅんらん}ともいうのですが、この人と横川景三^{おうせんけいさん}は非常に親しい関係^{けんけい}にあって、応仁^{おうにん}の乱^{らん}の時に横川景三^{おうせんけいさん}が京都^{きょうと}を逃げ出して避難^{ひなん}していた場所^{ばしょ}の人^{ひと}で大変^{たいへん}仲良^{なつら}くしていたわけですね。その人^{ひと}のために横川景三^{おうせんけいさん}は文明十五年^{ぶんめいじゅうごねん}の春^{はる}、村庵^{そんあん}霊彦^{れいげん}が賛^{さん}をしたちょうどその時に、春蘭^{しゅんらん}というお坊さんのために軸^{じく}をしたためておるんですね。おそらくその春蘭^{しゅんらん}が求めてきた軸^{じく}とこの図^ずがほぼ同時期^{どうじき}に京都^{きょうと}に来たために、どうも横川景三^{おうせんけいさん}はこの図^ずも春蘭^{しゅんらん}が頼んだものだろうと考えちゃったんじゃないかな、というふうに思っています。一年後^{いちねんご}に賛^{さん}をする時に、確か^{たしか}これは春蘭^{しゅんらん}が頼んだものだと、楊岐庵^{ようきあん}の図^ずだといって頼んだものだろうと、その時に書けば、そう間違^{まちが}うこともないんでしょうけれども、一年後^{いちねんご}に賛^{さん}を書いたために、そういう誤解^{ごかい}をしてしまったのではないかなというふうに私は考えております。

何^{なに}より私の言^{こと}いたいことは、地元^{じよん}の蔵内^{ざうない}数太^{すうた}さんが故郷^{こきやう}の寺^{てら}だと、この景色^{けいせき}を見て、これはまさに自分の故郷^{こきやう}の重玄寺^{じゅうげんじ}の寺^{てら}を描^えいたものだと直感^{ちよくん}したことを尊重^{そんじやう}したいと思うんですね。私^{わたし}のは、後づけ^{ごづけ}の理屈^{りくつ}であります。この景色^{けいせき}はまさに重玄寺^{じゅうげんじ}のものだというのは、やはり何^{なに}と言^{こと}ってもその中心^{ちゆうしん}にそびえています山^{やま}の形^{かたち}なんですけど、これは古い写真^{しやしん}ですがゴツゴツとした感じ^{かんじ}が非常^{ひじょう}によく似^にていると思います。今は残念^{ざんねん}ながら、木^きが茂^{さか}ってしまっ山^{やま}の形^{かたち}がよく見



「山寺図」のモデルといわれる大月山

えなくなっているんだそうですが、私がかねてからそういう木をぜひ切り払ってこの山の形がよく見えるようにして欲しいなとお願いしております。そうすれば本当にこの山寺図の山と実際の「大月山」が同じ形をしているということが、はっきりするのではないかなと思います。ここに地図がありますが、この地形のとおりですし、それから鳥居がありますが、この鳥居に位置するところに確かに今も神社があります。ということで、理屈よりも実際の景色を見れば、本当にここを描いたということが皆さんも納得していただけるのではないかなというふうに思っております。

（雪舟と備中・備前・播磨）

地元の記録、原本は今失われておりますが、『後月郡誌』という郡誌に掲載された文章は残っております。『天神社史』という記録の中に、「文明の頃、雪舟和尚当所大月山に住居の節」とある。この重玄寺に雪舟が住んでいたというんですね、文明頃に。「当社に参詣あり」、天神社に参詣したところ、菅原道真公の自画像は大変な珍宝であると。こんな人がいないようなところに置いておくと、雨漏りなんかしたら、

さぞかし傷んで大変であろうということで、これを重玄寺に預かろうと、雪舟が持ち帰ったという記録があります。実際、今の重玄寺さんに天神画像が残っております。大変な大幅で、年代も室町時代の中期を下るものではないと私は見ております。おそらく天神社から持って来たという天神像が、それに当たるのではないかなと思います。そういう符合とともに、問題はこの文明年間に雪舟が重玄寺にいたという記録ですね。何も文明年間に書かなくてもいいんですよ、記録にハッキリと。ですが、わざわざこの文明年間に、重玄寺に雪舟が住んでいたというのは、この絵を描く時期と合いますから、確かに雪舟がこの土地にその頃いたということが考えられます。なぜ雪舟がここにいたかということは、この重玄寺の開山さんであります千畝周竹さんとの関わりもあるでしょうし、実際雪舟も天神さんの画像をいくつも描いております。雪舟自身が天神信仰を強く持っていた。自分が仕えていた大内氏も天神信仰をしていたということもありますけれども、雪舟自身にとってもこの芳井の天神社の天神画像を発見してお寺に持ち帰ったという経験は非常に印象深いことであつたんだろうと推測いたします。要するに重玄寺というお寺が雪舟自身にとって普通のお寺とは違う位置づけにある、だから描いたのではないかなと思います。水墨画家が寺を描くということは、そうあることじゃないんですね。雪舟の場合でも残っている例を見ますと、三保の松原の近くにありまして清見寺というお寺のたたずまいと三保の松原と富士山を描いた絵があるくらいで、あとは中国に渡った時に、明日ご覧になると思いますが、仏通寺さんからお借りした『育王山図』という中国の有名なお寺の景色を描いた図があります。清見寺は日本で知られた名所ですね。富士山と並んで描かれるような非

常に名所として知られています。そういう名所を描くか、中国の有名な寺を描くというのならば分かりますけれども、他の人が知らないような寺を描く理由がないわけですよ。たとえこれが伊自良の楊岐庵であっても、人に頼まれれば仕方ない、描くこともあるでしょうが、この場合雪舟が自発的に描くということは相当自分の経験の中でもこの重玄寺というのが大きな意味を持っていないか、そういう景色を描くきっかけにはならないと思うんですね。

それが一体何かということですが、やはりそれは先ほどの冒頭に申しました千畝周竹さんとの関係に戻っていきます。千畝周竹さんの先ほどの語録『也足外集』というものを読みますと、当然色んなお寺やお坊さんの名前が出てくるわけです。東福寺という大きなお寺が京都にありますけれども、大変大きな寺なので、いっぱい塔頭があつていくつもの派に分かれています。で、雪舟は最初、総社の宝福寺の本山格であります東福寺のたくさんある各派の塔頭の中で、どこに属したかという問題がある。一つは宝福寺さんの住職の経験がある無夢一清という人が開いた塔頭、天得院という塔頭の可能性。もう一つは室町時代を代表する歌人、禅僧で歌人という人ですが、清巖正徹という、本拠地は井原の東の矢掛町の出身なんですけれども、その清巖正徹が属していた栗棘庵という塔頭です。千畝周竹の『也足外集』を見ますと、この栗棘庵に属するお坊さんの名前が出てくるんですね。雪舟の出身地、備中の先輩で有名な歌人、清巖正徹が属していたのも栗棘庵、千畝周竹さんの語録に出てくる禅僧が栗棘庵のお坊さん、ということであれば、雪舟は最初に東福寺の栗棘庵という塔頭の派に属していたのではないかな、ということが推測されます。清巖正徹と雪舟の関係も大変深いものです。清巖正徹

は小田氏といわれております。雪舟も小田氏だという説があります。とすれば当然、これは同じ氏族ですから清巖正徹の後を慕って東福寺へ行ったということが考えられますが、残念ながら小田氏は京都の石清水八幡宮の社僧がこちらに下ってきて小田氏となったというふうになっております。小田氏は紀氏という藤原氏ではない大きな氏であります。冒頭に雪舟は藤原氏とはっきりと書かれているということを行いましたので、残念ながら雪舟小田氏説というのは考えにくいのではないかなと思っております。千畝周竹を介すれば、同じ栗棘庵という東福寺のたくさんある塔頭の中の一つに関わるってことが言えるのではないかと、そこからさらに雪舟がこの備中から上京するに当たって誰がそれを勧めたかということになりますが、若い頃から雪舟という者の存在を知っていた可能性がある千畝周竹が上京を勧めたのではないかなということも私は考えたいなと思っております。誰が上京を勧めたか、本人の意思かどうか分かりませんが、先ほどから言っていますように最初に東福寺に行ったきっかけ、さらにはです、雪舟は東福寺から相国寺という別の寺に移っております。この相国寺に移ったきっかけを作った人も、先ほどから言っております千畝周竹と清巖正徹という可能性があります。といいますのは、雪舟が相国寺で師匠として仕えた春林周藤というお坊さんがおりますが、この雪舟が仕えた禅僧と清巖正徹、千畝周竹はお互いに知っていた。東福寺にいた雪舟を相国寺に移ったらどうか勧めたのも、もしかすると千畝周竹の可能性もあります。千畝周竹は近衛氏という貴族の生まれです。近衛氏というのは当然藤原姓であります。そういうことで同族ということもありますので、若い頃から雪舟の才能を知っていた千畝周竹が京都に上りなさい、東福寺で学

問をしていたけれども、どうも芽が出ない。それじゃあ相国寺しょうこくじに移って見たらどうか、という道筋を作ったのも千畝周竹せんみよしゅうちくという重玄寺ちゅうげんじの開山さんではないか、というふうに考えたいなと思っております。ですから、雪舟にとっては単にこの寺はたまたま通った寺でもなく、自分の人生を大きく動かした人が開いたお寺だということがあって、この寺を描き、残したいと、そう考えたのではないか、というふうに思わないと、なぜこの誰も知らないようなお寺を絵にしたか理由が分からないわけですね。雪舟にとって重要な意味があったと考えなくてはなりません。その後もう一度雪舟は山口から京都に上るんですけれども、その時期についての資料を掲げておきました。『播州書写山円教寺古今略記』という記録ですが、これは江戸時代の写本でありますけれども、その「諸堂造立供養之事しよどうぞうりゅうくようのじ」の二行目に「如意輪堂者にょいりんどう」とあります。書写山円教寺しよしゃざんえんきやうじ、これは姫路の近くの大変大きなお寺ですが、天台宗のお寺なんですけれども、その本堂、如意輪堂いりんどうが火災で延徳四年(1492)に焼けたんですね。二月に焼けたんですが、その二ヶ月後の上旬にたまたま慈雲じうんというお坊さんがこの書写山しよしゃざんに登って来た。慈雲じうんというお坊さんは「能画」、絵がうまい、「又道心者タルニ見」、非常に信仰心が厚いということを見て、この焼けた如意輪堂の再建の勧進僧かんじんそうを、満山で一切あげてお願いした。それを引き受けた慈雲さんのお陰で「莊嚴成り」、お寺が完成していくわけですが、この慈雲じうんという人は雲州の人、出雲ですね。そして「画者雪舟ノ弟子也」と、書いてあります。勧進かんじんの余暇に涅槃像ねはんざうや色々な絵を描いて、そのうちのいくつかは今も残っている、というふうに書いてあります。要するに、延徳四年頃に雪舟の弟子であった慈雲じうんという人が姫路の書写山しよしゃざんに登って来て、勧進かんじんを勤め、絵も描いたという

記録なんですね。この頃、雪舟は、播州とか備前とかに足をとどめております。播州は、当時は赤松氏という非常に有力な武将がおりました。この時期は大内義興という雪舟の主人が京都に上って足利將軍と共に近江の六角氏を討つ、征伐するという軍事行動を起こす直前に当たるんですね。どうも雪舟は大内義興が上洛する前に、この地域を歩いて様々な情報を収集していたのではないかなと思います。その一環として、赤松氏の有力な家臣の家に行って絵を描いたりした記録が残っております。大内氏は雪舟のそういった情報収集に基づいて、上洛をするわけですが、なぜ赤松氏のところに雪舟が行ったかという問題がある。赤松氏は細川氏の有力な配下で、本来ならば雪舟とは敵対関係にあるわけですね。冒頭で赤浜という莊園は藤原姓の者がいることから分かりますように、春日社の社領でありました。そこに対して守護である細川氏は自分の利益が欲しいわけですから、莊園に対して乱暴を行うということが記録の上で知られておりますが、ということもあって細川氏と仲が悪かったにもかかわらず、それと親しい赤松氏のところに出入りするということは、何か理由がある。大内氏が上洛するに当たっては、この山陽道、播磨を通過してしか上洛できないわけですね。大内義興の前の大内政弘が応仁の乱に京都に攻め上る時も、播磨の室津に500艘もの軍船をとどめたと言います。播磨を通過しないで京都に上ることはできないわけですから、その地の有力な武士ともちゃんと手を打っておかないと安全には上れませんし、滋賀の六角氏を征伐する時も赤松氏と共に攻め入る。そのためにも、事前に情報を収集しておきませんとその六角征伐もうまくいかない、ということで雪舟はその露払いのような形で大内氏に先立って、播磨、備前の情報を集めて、主人のとこ

ろに送っていたのではないかなと思われま
す。画家であれば、有力な武士の家にも遠慮なく近
づくことができるわけですね。普通そういうの
は禅僧が担うんですけれども、雪舟の場合は禅
僧であり且つ画家ですから、土地の有力な武将
に出入りしやすいという身分であります。雪舟
というのは「画聖」という言葉で、^え画の^{ひじり}聖とい
うふうに褒め称えられますけれども、実際のと
ころは大内氏に仕える大内家の僧の一人であっ
たわけですから、大内氏のために働くのは自分
の義務でもあったんですね。ただ絵を描いて過
ごしていればいいというわけにはいきません。
やはり大内氏のために必要な情報を収集して送
るということをこの頃雪舟はしていたんですね。
ちょうどその頃、雪舟の弟子という^{じゅうん}慈雲とい
う人が^{しよしゃざん}姫路の書写山に登っておるということから
しますと、この段階ではもう雪舟は大内義興と
共に京都に行っておると思いますが、この^{じゅうん}慈雲
が出雲の人だということであれば、出雲から同
道して播磨、備前に来たのではないかなとい
うふうに想像されます。出雲出身の雪舟の弟子と

いうのは、私はこの人以外には知らないです
ね。石見には一人くらいはいますけれども。この時、
^{じゅうん}慈雲は雪舟の弟子となったのではないかなと思
われます。そして井原と合併した^{ちようげんじ}重玄寺のある
芳井町は、その先は出雲に続いております。出
雲からこの備前に来るためには、芳井町を通ら
ないといけないわけですね。当然^{ちようげんじ}重玄寺の辺り
も通らなければならない。雪舟は全国を歩き回
っておりますが、間違いなく出雲から備前、山
陽道、井原を通して岡山という道筋を度々歩い
ております。明日はその雪舟が実際に歩いた道
を、私達も歩くことになります。雪舟が全国
を歩いたといっても、確かにこの場所を歩いた
ということが分かるのは、そうざらにはありま
せん。その数少ないのが、この井原、芳井町、
^{ちようげんじ}重玄寺辺りということになります。私達は本
当に雪舟の足跡の上を歩くんだという体験が、
明日できるのではないかなと思っております。
私の話はこれで終わります。



井原市芳井町吉井の風景